

東播磨のアカミミガメ防除の18年～そしてクサガメ防除へ？

○西堀 智子・久米 卓美

(和亀保護の会)

1. 和亀保護の会と寺田池協議会

和亀保護の会が東播磨に縁ができたのは、2006年秋、加古川市の寺田池での池干しの時であった。水が引いて浅くなった水面には無数の「てんてん」が見え、双眼鏡で覗くとそれらは泥の中から首を出したカメの頭であり、その形状からほぼすべてがアカミミガメであることが分かった。我々は衝撃を受け、たまたま来ておられた兵庫県の職員さんを捕まえ、勢いで「アカミミガメを駆除しましょう」と言い寄った。また寺田池に流れ込む自然護岸の水路が工事で垂直護岸に作り替えられることを知り、「横穴がなくなれば在来のカメが越冬できなくなる」と訴えたのであった。普通なら「また考えときますわ」で流されそうなことだったが、その時の職員さんは初対面でどこの馬の骨とも分からぬ我々の言葉に耳を傾け、話し合いの場を用意した上で工事の図面を引き直して下さった。そして池干しイベントのあった1週間後から我々もアカミミガメ防除を始めた。その作業には時々県の職員さんが姿を見せて下さった。

当時東播磨県民局は「いなみ野ため池ミュージアム構想」を打ち立て、農業のためだけでは維持しにくくなったため池に多くの意味（例えば生物多様性を守る場としての機能）を見出し、それらに関わる多くの主体を呼び込もうとしていた。またそれぞれのため池の地元で住民自らが運営する「ため池協議会」の設立を促していた。寺田池でも「寺田池協議会」が発足し、ため池を中心に様々な活動が行われていた。我々も協議会活動に乗りながら、地域と共にアカミミガメ防除を進めていったのである。

もともと我々の活動は綿密な計画や目標設定もなく、いきなり始めたものであったが、その都度問題を解決しながら、地域の人々と目指すべき形を模索していった。月1回のカメの生息調査とアカミミガメ防除作業はルーティンにしていたが、ため池の清掃活動の後でカメの話をして欲しいとか、お祭りでアカミミガメ料理を出しましょうとか、参加者を募ってアカミミガメの捕獲競争をしましょうとか、協議会の方からも様々な提案をいただき、それを東播磨県民局が支援する形で実現していった。ため池横の農業高校の生徒にカメを絡めた外来種問題の話を頼まれることもあり、時には生徒たちと一緒にかご罟を引きあげたりもした。ある時彼らが自分たちだけで作った日光浴罟が寺田池に浮かんだこともあり（最初の罟はダメ作品だったが、その後進化した）、アカミミガメ問題に対する関心は地域に広がっていった。

多くの住民がアカミミガメ問題に関心を持ち、防除活動やイベントにも参加したが、いつもその中心になってお世話下さる寺田池協議会の重鎮たちは、もともと寺田池周辺の農地で水田耕作を行っていたオッチャンたちであった。農業者であるからこそため池を大事に思う気持ちは人一倍強く、「ウチのため池には外来種はいらん」と月1回大阪からやってくる我々も快く迎えてくれたのである。

2. 地元の人もビックリ、寺田池の劇的な環境変化

寺田池は13.6haの大きなため池で、アカミミガメ防除を続けてもそう簡単に目に見える効果は表れなかった。しかし5・6年経った頃から最初の目に見える変化が現れた。2006年の池

干しの際にはスッポンは3個体しか確認できなかったが、その頃からしばしばかご罾に入るようになったのである。2013年、寺田池協議会の10周年記念行事の際、罾かけの実演で大きなスッポンが入った。「アカミミガメを防除したら寺田池にスッポンが戻ってきた！」オッチャンたちと我々は、今後さらに防除を続け、「寺田池協議会の宴会でスッポン鍋ができるように頑張ろう」という新たな目標を打ち立てたのであった。

スッポン鍋を頭に浮かべながら、オッチャンたちと我々はその後も防除を続けたが、2015年、久しぶりに池干しが行われることになった。池干しイベント当日は200個体越えのアカミミガメを捕獲した他、前回の池干しでは見ることがなかったスッポンの幼体も確認され盛り上がった。そして翌年、寺田池は地元の方も驚くような変化を遂げたのであった。それまで水面には水草はほとんどなかったが、2016年には一気に様々な水草が水面を覆ったのである。池干しによって埋土種子が芽を出し、アカミミガメ防除のおかげで食べられることなく育ったのだろう。芽を出したのはガガブタやイチョウウキゴケ、オオトリゲモなど多種。さらにハスも芽を出し、数年後にはレンコン掘りができるほどになった

3. 寺田池、東播磨のため池の今、そして今後

寺田池には現在5基の日光浴罾が浮いており、カメの活動期には月に1・2回オッチャンたちと一緒に引き上げを行っている。罾によっては1個体も入っていないこともあるが、水草が豊かになった分、アカミミガメにとっても棲みやすくなり、捕り残したアカミミガメが繁殖を繰り返すので油断は禁物である。とはいえ水面のヒシの葉っぱの上で日光浴しているスッポンの幼体がしばしば観察され、産卵期にはカラスにほじくり返されたスッポンの産卵巣が複数見られる。しかし水面のガガブタは姿を消し、ほぼヒシに置き換わり水面を覆いつくしている。そろそろ攪乱を起こさねばバランスが崩れる一方であるが、池干しをするには予算面が厳しい。また、2006年にはピチピチだったオッチャンたちに老いが忍び寄ってきた。しかも離農や退職年齢の引き上げによって新しいオッチャンが供給されないのである。

さて、我々は寺田池だけでなく、東播磨の複数のため池でその地域のオッチャンたちと共にアカミミガメ防除の道を歩み、ハスの復活など一定の成果を得てきた。一方で在来種であるニホンイシガメは、これまでの調査によって山際や山中のため池で僅かに残っているのみだということが分かっており、さらに雑種も確認されている。雑種化を食い止めるためには、クサガメの防除が必要になってくる。今後、アカミミガメ防除で培った手法や枠組でクサガメ防除にも取り組み、ニホンイシガメの保全を進めていきたいが、どの地域でも大なり小なり「新しいオッチャンが供給されない問題」が顕在化してきている。活動をスムーズに進めるためには、担い手の減少問題を解決せねばならない。



写真1. 寺田池 2013年9月 (アカミミガメ防除前)



写真2. 寺田池 2019年9月 (アカミミガメ防除後)